

# 院外茶話

vol.131 平成 28 年 4 月 1 日

土手の柳は風まかせ  
好きなあの娘は口まかせ  
昔の歌も今の歌も  
何を歌っているのやら

## 歌は世につれ

歌は世につれ、世は歌につれ。こごと爺はプレスリーやビートルズの時代。何年振りかでカラオケに行ったけど、娘が選ぶ曲は聞いたことがないものばかり。



バケツに入ってきたきれいな花は。

ナンバーワンとかオンリーワンとか言う歌は、まだわかりやすかった。でも、バケツに入ったどの花がきれいだったとか、40代の男が口を揃えて歌うことか。

戦前の平均寿命は50歳がいいところで、人間40代ともなれば、辞世の句の一つも考えてよい年齢である。

最近目に付くのは、歌う時に舐めるほどマイクに近づく人たちで、時には本当に舐めているのではないか。

こごと爺の脳裏にある歌手は、もっと堂々と歌っていたのであります。ネクタイを締めて、直立不動。真剣勝負の歌い方で、口からマイクまでの距離は、デスクトップのコンピューターくらいあった。

泣くな よしよし ねんねしな  
山のカラスが 泣いたとてー

確かに今、こんな歌は受けないだろう。私もそう思う。でも、歌詞は別として性能の悪いマイクを使ってあの歌い方だから、東海林太郎とはよほどの声の持ち主であったに違いない。



真剣勝負の歌は直立不動。

藤山一郎はもともと本格的なオペラ歌手を目指したそうです。でも、生活のために歌謡曲を歌った。

代表曲は「青い山脈」。昭和24年の発表でした。私が生まれた年だけど、何回も映画化をされて、その度にヒットをした曲なのでよく知っている。

古い下着よさようなら

さみしい夢よさようなら

終戦直後、物のない時代でならではの歌詞で、改めて聞くと何とも寂しい思いです。

雨にぬれてる焼けあとの

名も無い花もふり仰ぐ

現代の花屋のバケツに咲いた花と、戦後の焼け跡に咲いた花。同じ青春ものの歌詞にしても、そこにはあまりにも大きな開きがある。

映画「青い山脈」のヒロイン、島崎雪子の役を演じたのは原節子でした。

その後「青い山脈」は、三回もリメイクをされており、雪子役を務めたのは司葉子、吉永小百合、中野良子。

こんなにヒットをした映画なのに、当の小説は絶版になってしまった。ちなみに作家の石坂

洋二郎氏はこの近辺、田園調布にお住まいだったそうです。

流行歌手藤山一郎のヒット曲は「青い山脈」だけではない。どれも明るくて、テンポの良いものが多かった。

「東京ラブソディー」。

花咲花散る宵も 銀座の柳の下で・・

楽し都 恋の都 夢のパラダイスよ

貧しかった時代の歌だけど、明るく歌いあげる声には、デフレのデの字も感じない。

その「夢のパラダイス」があったのは、銀座ではありません。何をかくそう、この自由が丘です。自由が丘は広小路通り、今で言うヒロストリートの脇の一番街。点灯をしないネオンサインが今でも残っている。



自由が丘は夢のパラダイス。

恋の都、東京にあふれたのは恋の歌。それは単純に男が女を、あるいは女が男を慕う内容でした。

あなただけよと すがって泣いた～

お金も着物もいらぬわ～

ところが、これではあまりに変わりばえがないのか、最近の歌詞は少し変わってきます。

男はあんただけじゃない～

やっぱりおまえは出ていくんだな～

故意か偶然か、掛け合いのような歌があつて、「黒い花びら」は水原弘。

恋の悲しさ～ 恋の苦しき～

もう恋なんかしたくない～

そしてこれは、榎原敬之の返歌なのか。

もう恋なんてしないなんて

言わないよ絶対～～

歌のテーマは恋と酒。それに故郷や親子の情愛。でも、もう一つ前の童謡、唱歌にはかなり文学的で悲しいものが見られます。

それは北原白秋作詞、島村抱月作曲の「城ヶ

島の雨」。

雨はふるふる 城ヶ島の磯に

利休鼠の雨がふる



白秋はここで死のうとしたのか。

何気なく歌を聞いていたけれど、これは北原白秋が姦通罪で告訴をされ、実家が倒産した時の絶望感を歌ったものでした。

死を決意して訪れた城ヶ島で見た利休鼠の雨とはどんな色か。千利休が好んだ茶碗の色ではなく、緑と灰色の間くらいの色で、雨がこんな色に見えるとは、よほど陰鬱な心を歌ったものでしょう。さらに歌は続きます。

雨は真珠か 夜明けの霧か

それともわたしの忍び泣き

当時は衛生事情も悪く、生まれても満足に育たない子が多かった。野口雨情作詞、中山晋平作曲「シャボン玉」。

シャボン玉とんだ 屋根までとんだ

屋根までとんで こわれて消えた

ただのわらべ歌のようだけど、野口雨情は生後7日目に娘、みどり を亡くした。

シャボン玉消えた とばずに消えた

生まれてすぐに こわれて消えた

早くに逝ってしまった娘を偲んで書いた歌と聞いた。

童謡にしる童話にしる、子供相手になぜかくも悲しい話が多かったのか。

マッチ売りの少女は、雪の中で凍えて死んだ。ヘンゼルとグレーテルは口減らしのために、山の中に置き去りにされた

かちかち山のタヌキは、悪いことをしたとはいえ、背中を焼かれて、火傷跡にはトウガラシをすり込まれた。ずいぶんと残酷な。

今、子供の番組を見れば、太陽に向かって歌う、明るい歌が多いけれど、さて、現実を覆うのが良いか、悲しい将来を少しでも見せておくのが良いか。